

事業名

## 気軽に集まれる場所作り～困った時に SOS が出せる井戸端場

今は関わりが持てなくても、本人が困った時に相談できる場所、見るからに「相談所」というものではなく、買い物ついでなどに気軽に寄って相談や交流ができる場所作り。

### <活動内容>

- ・困りごと相談所の開設（いつでも気軽に行けて、誰かに相談に乗ってもらえる井戸端場のようなものにする）
- ・井戸端場は、鍵っ子も学校帰りに寄って、親が帰るまでの時間を過ごせる場所にする。
- ・生協の宅配や移動販売などの利用者を募り、配達場所は井戸端場にまとめて配達してもらう。
- ・目がみえづらくて一人で注文票を書けない人もいるため、井戸端場でみんなと一緒に確認しながら注文票を書けるようにする。
- ・資源回収に資源物を出せない高齢者もいるが、子どもたちに手伝ってもらうことで交流できる。その時に子どもから井戸端場に誘ってもらうなど、情報発信してもらう。

### <活動場所>

- ・商店やスーパーなどの隅、空き店舗、協力者の自宅をお茶のみ場として開放してもらうなど。

### <活動を始めるときの準備や進め方>

- ・井戸端場に来ない人には子ども会に協力してもらい、子供と民生委員や福祉委員がペアになって「健康に気を付けてください」などと言って、牛乳やヤクルトなどを届けながら安否確認する。
- ・井戸端場から自宅まで注文した荷物を運ぶことが出来ない人には子供が配達を手伝う。  
手伝い 1 回につき 1 シールを子供にあげて、貯まるとノートなどと交換→子供が喜んで手伝ってくれるのではないかな？（自宅まで運んでくれる若い力を募集）
- ・次の資源回収日の予告チラシに相談所の PR を載せる。
- ・井戸端場の常駐員をどうするか検討する。
- ・子ども会に井戸端場の飾りつけをお願いする。
- ・出来ることから始める。

### <一緒に行く団体>

子ども会・町内会・学校・地区民児協・地区社協・生協

### <活動を行った場合に期待されること>

- ・世代間交流・認知症の見守り、理解
- ・安否確認
- ・プチボラ（特に子供たちがお年寄りの荷物を持ってくれたり、ゴミ出しを手伝ってくれたり、ちょっとしたボランティアをしてくれるようになる）

井戸端場となる場所は、どのように見つけ、誰が交渉した方がよいでしょうか？

→集会所やコミュニティセンター以外に銀行の会議室や開業医、店舗の集会所などを集う場として活用している地区もあります。こうした場所は、地域の方々の情報から見つけることも多いようです。利用の交渉も、それぞれの関係性から検討していきましょう。

事業名 **お父さんの頑固料理～食べて飲んで元気になろう～**

サロンに参加する男性が少ないことから、男性が対象ということが事業名を見て一目でわかるものにした。

<活動内容>

- 料理教室や食事に関するサロン
  - ・妻を喜ばせる朝食づくりの会、長生きできる焼酎のつまみづくりの会、食事を伴う茶話会
- 趣味の集いなど
  - ・落語・盆栽・囲碁・ハイキング・料理・カラオケ・飲み会・屋外レクリエーション
- 花壇作り
  - ・地域清掃から始まり、集めた枯葉などを利用したたい肥作り→花壇作り

<活動場所>

- 料理教室→調理施設があるところ（町内会集会所・コミュニティセンター・市民センター 自宅・生協）
- 趣味の集いなど→町内会集会所・コミュニティセンター・市民センター
- 花壇作り→地域の公園・集会所・道路

<活動を始めるまでの準備や進め方>

- 料理教室
  - ・活動準備室の立ち上げ→開催日決定と会場確保→団体への声掛けや調整→講師依頼→費用や参加費の決定→チラシの作成（口コミも含む）
  - 老人クラブや町内会役員に参加者を集める依頼、サロンで行う場合、主催者への説明と協力要請、講師探し（1回目は有名人を呼んで料理を覚えてもらう※対象者が男性なので、肩書のある人に頼む？）
- 料理が苦手な方もいるので…
  - ・利き酒教室やワイン教室の開催。その場合の講師は蔵元やソムリエ。生協などの惣菜担当に協力してもらい、簡単なつまみの作り方教室。
  - ・料理作りだけでなく、食事の後に囲碁・将棋・麻雀などのレクリエーションを組み合わせる。
- サロンになかなか出てこない方には、子ども（小学生など）と一緒に誘いに行く。

<一緒に行く団体>

町内会・老人クラブ・子ども会・婦人会・学校  
(小・中・高・大学)・生協・地区社協・  
地域包括支援センター・栄養士

NPO や地区社協、地域包括支援センター、市民センターなどが主催し、男性を対象とした事業（メンズキッチン、男の台所）などを行っているところもあります。連携したり、進め方など参考にしてみてください。

<活動を行った場合に期待されること>

- ・男性の孤立化を防ぐ。
- ・調理では同時に二つのこと（手順を考える・作業する）をすることで認知症予防になる。
- ・地域清掃→花壇作りでは、継続した活動を行なえることや落ち葉を利用し花を咲かせることでの達成感、自分たちが作った花壇が散歩の場になったり、花を見ることでの癒し効果にもなる。

事業名よりそいカフェ

認知症の方へ寄り添う活動を多くの場所で行いたい。  
気楽に誰でも入れるように「カフェ」という言葉を使用。

<活動内容>

- ・七夕祭りの短冊作り →子ども会と一緒に作ることで顔を覚えてもらい、見守りに参加してもらう土台をつくる。
- ・敬老会への子ども会の参加→一緒に楽しみながら認知症について理解を深めてもらう。将棋や囲碁などの体験を通して年配者を敬うという経験にもつながる。
- ・サロンへの参加 →お茶出しやお菓子の配付などのちょっとしたお手伝い、得意分野(ピアノ、生け花など)の披露を依頼することで、当事者(認知症の方など)と外部とのつながりを生み出す。

<活動場所>

- ・地域のコミュニティー施設、学校、企業の参加も望みたい。

<活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・まず認知症について、本人や家族、ご近所などの理解を深めることが必要ではないか？  
本人、家族→恥ずかしい、迷惑をかけられない、本人が嫌がるなどの気持ちがあり内向的になっていくのを防ぐため、どんどん周りに教えて頼むなど家族の意識を変えていけるようにしたい。
- 町内会 →連合や町内会行事に積極的参加を促し、一緒に活動や運動をする事で地域住民の認知症への理解を深める。認知症の症状によって、行事参加に抵抗がある方には運営のお手伝いや草刈等簡単な作業で社会参加することで自信が付き外との関わりを持てるようになる。
- 地域住民 →若い世代、小中学生への啓蒙活動  
例) 認知症講座や講演会を開催して理解を深める。

<一緒に行う団体>

地区社協、連合町内会、各PTA、小学校、病院など

<活動を行った場合に期待されること>

地域全体で、認知症の方々の見守りを行うことでコミュニティーのネットワークが密になり、情報の共有や提供も活発になる。

弱者に寄り添うことで助け合いの気持ちが生まれる。

地域包括支援センターと地域諸団体などが一緒になり、施設や作業所、店舗など様々な場所で「認知症カフェ」が開催されています。身近な場所で気軽に相談したり、当事者同士や支援者と当事者との交流を深めることにより、日常的にも声かけや支えあうことにつながるのではないのでしょうか。

事業名 支援者マップの作成

役員や支援者が変更になった時でも支援者や要援護者の世帯がわかる詳しい地図があれば、災害時等に迅速な対応ができる。

<活動内容>

- ・高齢者や要援護者に「無事です白いタオル」や「無事ですカード」を配布、災害時などに家の外に出してもらおう。
- ・小地域内で行事をすることで、顔の見える関係づくりや普段からのおつきあいを進める。
- ・回覧板や行事案内の直接手渡しで、安否確認に繋げる。

<活動場所>

- ・集会所、市民センター、地域全体

<活動を始めるまでの準備や進め方>

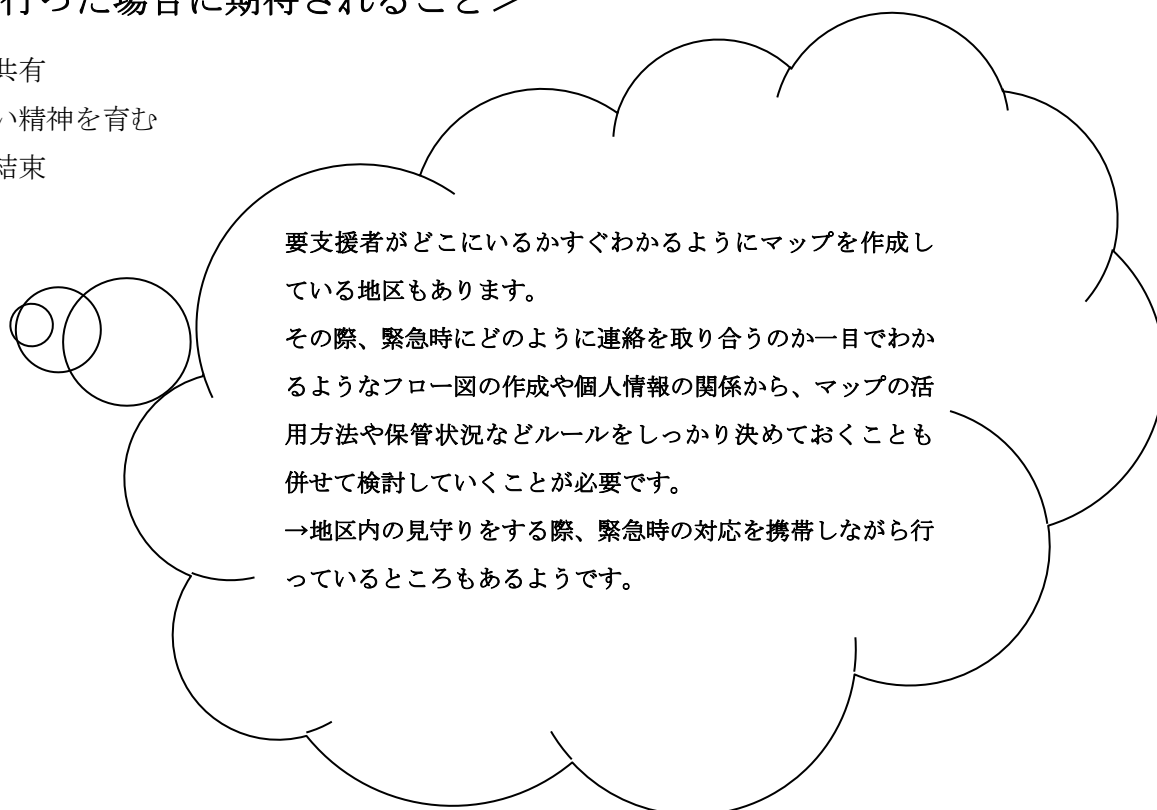
- ・要援護者リストの見直し→古いリストの削除
- ・詳しい町内地図の取得  
パソコンに詳しい町内会員へ打診や行政への依頼（ゼンリン地図提供依頼など）
- ・小さな集会所で小さな見守りの実施（班会議まで要援護者情報と提供を広げる）  
毎年替わる班長に要援護者の情報提供することに異論はあるが、災害時の人命優先を説明していく。

<一緒に行う団体>

- ・地域住民、行政、地域包括支援センター、市民センター

<活動を行った場合に期待されること>

情報の共有  
支えあい精神を育む  
地域の結束



事業名 **楽しく自然に学べる場づくり**

60 代後半から 70 代の方で地域との関わりが薄い方への対応について、何か興味あるものなどを探って参加してもらおうようにする。

<活動内容>

- ・運動→体操（ラジオ体操やストレッチ）、ヨガ、座ってもできる運動、子供や地域の方々をメインにスポーツ交流
- ・料理→郷土料理づくり、スイーツづくり
- ・イベント→音楽カフェ（お茶を飲み、音楽を聴きながら認知症の知識を学ぶ）、コンサート、季節のものを取り入れた企画（年賀状作成を見据えた書道教室など）
- ・その他→美容教室、伊達政宗と関わる国見・八幡の歴史を知る会、コミュニケーションマーじゃん、ゲーム、歌（アカペラ、ボランティアと一緒に歌を歌う、カラオケ）、町内会単位でサロン

<活動場所>

- ・町内会集会所や会館、市民センター、コミュニティセンター、小中学校、大学、児童館、地域包括支援センターの施設や老人ホーム、生協、公園、スーパーのフリースペース（テーブル・イスがあり食事可能な場所）、美術館や博物館

<活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・コミュニケーションを多くとる。  
戸別に話しかけ→楽しいからと隣近所で話す（クチコミ）、見かけたら声をかけ世間話、買い物先で会ったらニッコリあいさつ
- ・地域の情報を集める。
- ・中心になる方の取持ちの仕方を考える。
- ・内容に応じた活動場所の確保

<一緒に行う団体>

地区社協、地区民児協、日赤奉仕団などの福祉関連団体、町内会、地域包括支援センター、市民センター、行政、学校、特技をもつ地域住民

<活動を行った場合に期待されること>

家族以外の人との会話ができる。  
心も身体も健康になれる。気軽に出かけられる。  
生活にうるおいがプラスされ、いきいきと老後が送れる。  
世代間交流になる。  
地域住民同士が仲良くなれる。  
コミュニケーション促進  
防犯につながる。

地域は人材の宝！  
地域にどのような方がいるのか把握するためには、ロコミや色々な方々と顔を合わせたり、話したりすることから発見することもあります。  
まずは、サロンや個別訪問などで得た情報をまとめてみるのも1つの方法ではないでしょうか。

事業名 **情報を共有する場づくり**

要援護者の情報の(共有)把握がむずかしいため、大きく2つのパターンで進めてみる。

<活動内容>

① サロンなどに参加できる方について

サロンの開催→サロンのあり方を再考し、参加者をお客様扱いではなくやりたいことや話したいことが気軽にできる場になるようにしたい。参加者を限定しない。

(例) 茶話会(近くの場所で、小さな規模で誰でも気軽に参加できるもの)

郷土料理づくり(地域の方を講師におくずかけや仙台風お雑煮など作って食べる)

もちばなづくり(地域の老人会の方を講師に季節に合ったものを作る)

② 外に出て来られない方について

・地区の一斉見守り訪問活動に町内会、福祉委員、民生委員と一緒に訪問し、情報を共有する。

⇒なかなか訪問できない方については、何度も訪問したり、ケア会議などを開催するなど、様々なアプローチをしながら関わっていく。

・テーマを決めて福祉委員、町内会長が集まる場や要援護者への対応などについて関係機関や互いに相談できる場を作る。※地域包括支援センターと地区民児協との連絡会をすでに実施している地区もあり。

・小地域福祉ネットワーク活動のブロックごとの勉強会や対応の仕方などについての相談会の開催。

<活動場所>

コミュニティセンター、市民センター、集会所または町内会長宅など

<活動を始めるまでの準備や進め方>

・情報の共有について、町内会で共有するメンバーを決める。(町内会長、福祉委員、民生委員など) 情報共有のルールを作る。

・情報の収集について、町内会の班長会議などにて情報を収集し、情報を共有する上記メンバーにて検討、対応する。

<一緒に行う団体>

① 地区社協、子ども会、老人会、各町内会班長、ジュニアリーダー、日赤奉仕団

② 地区社協、町内会、地区民児協、地域包括支援センター、行政

<活動を行った場合に期待されること>

・住民→安心につながる。

・支援者→皆で見守る体制ができあがる。

(特定な人に負担が偏らない)

事業名 ○○カフェ

情報発信や共有もできる気軽に集まる場所を作りたい。○○には地区の名前などを入れ、地域の資源や状況に合わせた集いの場

### <活動内容>

- ・歩いて通うことができる範囲に集いの場所をつくる。  
町内広場（マンション住民も参加できるような茶話会やサロン、認知症についてのお話会  
介護予防の自主グループの活動など）  
情報交流会（市民センターの市民活動室を使い、若年層も気軽に立ち寄れる場を作る。  
そこに情報掲示板を置き、発信や収集できるようにする）
- ・市民センター主催の講座（マンション防災）参加者を対象に茶話会を開催

### <活動場所>

- ・老人憩いの家、集会所や復興公営の集会室、コミュニティセンター、マンションの集会室や共有スペース、企業が提供してくれる部屋、市民センター市民活動室、小学校の空き教室、時間に制約されない可能なスペースとなりうる地域の空き家など

### <活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・場所の調整  
空き家の活用（地域のことを良く知っている町内会長などに打診依頼）  
小学校への交渉（民生委員、地区社協や区社協などが担当）
- ・活動の進め方  
新しいことを考えるのではなく、地区で行われていることをベースにして行う。  
固い内容のものではなく自由に行う。

### <一緒に行う団体>

地区社協、地区民児協、町内会、地域包括支援センター、市民センター、介護予防の自主グループなど

### <活動を行った場合に期待されること>

情報交換、相互交流や情報提供につながる。  
問題意識の共有ができ、解決の手立てにつながる。  
継続することで、次世代への継承となる。

仙台市社協では、平成 22 年度から地域福祉活動推進のための活動拠点づくりを進めており、集会所やコミュニティセンター、小学校など様々な場所が地域の拠点として活用されています。

拠点によっては「地域や学校から情報が寄せられるようになった」「地域住民からちょっとした用事でも立ち寄れると喜ばれている」というところもあり、地域のニーズを把握する窓口にもなっています。

事業名 普段から顔の見える関係づくり

普段から話しやすい関係を作っておくことで情報共有もスムーズになる。

### <活動内容>

- ・地域包括支援センター、行政が中心となったケア会議の定期、長期会議を開催
- ・地域包括支援センター主催の圏域ケア会議の活用
- ・町内会長（福祉委員）と認知症家族との連絡ノートの活用
- ・地区民児協、地区社協（福祉委員）との会議
- ・支援者間でのネットワーク作り
- ・相談しやすい関係をつくるため、地域支援者との関係づくり

(例)

いきいきサロン、介護予防教室、配食の活用

公園での園芸、ガーデニング

高齢者→夏、冬 プレゼントなど持参して訪問

若手福祉委員募集

小中 PTA 活動者の参加、事業実施（例 読み聞かせ会、紙芝居）

} 共有が必要な情報収集

} 活動の担い手

### <活動場所>

- ・市民センター、コミュニティセンター、小中学校の空き教室などの利用

### <活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・会議の中での個人情報オープン化する。同時に取扱いのルールを決める。
- ・地域の多くの団体が形成している会議に出席（ねっと、チャンねっと）
- ・マスコミの活用
- ・地域の会議に PTA など入ってもらう。
- ・活動助成資金をどうするか？出資者の参加

### <一緒に行く団体>

地区社協、地区民児協、連合町内会、町内会、地域包括支援センター、行政、サービス事業所、その他各団体、警察、マンション管理人（理事会）、配達員（新聞・ヤクルト・牛乳・宅急便など）

### <活動を行った場合に期待されること>

異変に気づいた時、どこに相談したらよいかスムーズになる。

要支援者にチームで関わることが出来る。

地域の活動を住民が知る、理解につながる。

同じ地区の中で、各団体がバラバラに活動するよりもそれぞれの情報を共有しながら、連携し対応する方が効果的かつ継続的な支援につながります。地域によっては、団体同士の情報共有の場として連絡会やネットワーク会議などを定期的で開催しているところもあります。



事業名 **担い手の発掘**

- ・定住の 60 代を取り込みたい（特にマンション住まいの方）
- ・小中学生の活動を通して親世代への啓蒙に
- ・新しい担い手を見つけることで、町内活動等を活発にしたい。

<活動内容>

- ・利き酒会→リラックスして参加でき、品評で話が弾む。男性の参加が望める。
- ・男性抜きの「女子会」
- ・職場体験学習に地域町内会のサロンなどお手伝いのお願いはできないか？
- ・ゲートボールのような運動活動

<活動場所>

- ・市民センターなどの公共施設、小学校や校庭など

<活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・まずは地区のイベントなどに出てきて欲しい、接触をもちたい。  
男性が参加しやすい、興味をもってもらえるような内容を考える。  
興味をそそるタイトルやインパクトがあるものにし、講演会などへの参加を働きかける。  
楽しい集いが次回への参加につながるため、参加者が楽しめる会にする。
- ・小学生、中学生  
地域の学校へ働きかけ、認知症講座やボランティアの啓蒙活動を行う。  
ボランティアに興味を持ってもらい次へ繋げる。

<一緒に行く団体>

市民センター、地域包括支援センター、学校支援地域本部、区社協、地区民児協、地区社協、酒造会館、地元酒造、小学校、中学校

<活動を行った場合に期待されること>

住民同士の交流、将来の担い手になる。

- ・学校支援地域本部など学校と地域、企業と地域を、誰がどのように繋げたらよいでしょうか？
- ・経費は？

→小学校の評議員などに就かれている地域の方々も多いと思います。地域の企業についても、なんらかのつながりがある方が窓口になってもらえると話しやすい場合もあります。経費についても、どこまで負担できるか、相手によっても変わりますが、長く続けるためなるべく負担が少なくて済むように多様な地域資源と話し合ってみてはどうでしょう。

事業名 **地域力を養う**

担い手育成のために行う活動が、地域住民のコミュニケーションを深めることにもなり、ひいては地域力を養う結果になる。

<活動内容>

- ・町内の行事を利用する。  
七夕飾り作りや餅つき会で子ども会に協力をもらう。餅つき会には中学生にも声をかける。地域のサロンに小学生も参加してもらい、学習発表や特技の披露をしてもらう。敬老の日にメッセージカードを作り小中学生に届けてもらう。
- ・交流会を開いて、町内の外国人にも来てもらう。
- ・お祭りなど文化として根付く行事を行う。

<活動場所>

- ・町内行事で・戸別訪問で・サロンの中で

<活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・行事等に協力してもらうとき、始めから役割分担するのではなく、少しずつ役割を担ってもらうようにして、フォローも行う。安心して参加できることがわかると次から自分たちもやってみようという気持ちになってもらえる。
- ・中学生が地域清掃をしてくれている。中学生にも担い手になってもらえるよう、中学校や中学生の保護者の集まりなどに協力を依頼する。
- ・地域のコミュニケーションが大切であるため、新年会などを開いて交流を深める。
- ・地域外でボランティア活動をしている人を地域の活動に誘う。

<一緒に行う団体>

町内会、子ども会、中学校、健全育成会（中学の保護者の集まり）

<活動を行った場合に期待されること>

地域住民のコミュニケーションが深まる。

地域で子供たちの成長を見守れる。

担い手（協力者・理解者）

を増やせる。

ある町内会では、七夕飾りについて、最初は町内会が中心となって準備し、子ども達には短冊を書いてもらうだけにしていました。短冊に似顔絵とメッセージを入れてもらったところ、子ども達の短冊を見た保護者に好評で、その後、子ども会が七夕飾りを作ってくれるようになりました。餅つき会も町内会が開催していましたが、子ども会にも少しずつ役割を担ってもらうことで、協力してもらえるようになったようです。このように、まずは一緒に行うことが次の一歩につながることもあるようです。

事業名 次世代の担い手参加促進（まず、班長から）

現状では担い手発掘が難しい。町内会活動に理解・協力してもらうためには、町内会員が引き受ける班長への働きかけが担い手につながる。

<活動内容>

- ・新班長が出席する町内会総会を活用して、活動参加を依頼する。
- ・活動内容と活動の必要性について勉強会を開く。
- ・班長が無理なく出来る範囲の担当班の見守り（休日や仕事の帰路での外からの見守りや町内清掃時の声かけ→心配な点は福祉委員や役員に引き継ぐ）
- ・サロンへの参加（年間予定から出席できる内容または日時を選んでもらう）
- ・地区全体の高齢者や認知症の方の情報共有→見かけた時には声掛けを依頼する。

<活動場所>

- ・町内会

<活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・役員が準備（総会資料とは別に依頼文書作成）
- ・総会への出席促進（お菓子などのお土産を用意）
- ・新班長へ町内会の実情説明、お手伝いをして欲しい内容を説明
- ・班長の集まる全体会を持つ→班長同士の話し合い（現場の話しを聞く）
- ・負担を感じないような活動に工夫する。

<一緒に行う団体>

地区社協、地区民児協、子ども会

<活動を行った場合に期待されること>

町内会に参加する方が増える。  
町内会の仕組みや課題がわかる。

地域に多くの見守る「目」があることは、住民の安心につながることもなります。最近では、できる時間にできる範囲で手伝ってもら「プチボランティア」も出てきました。地域の実情に応じて色々な支えあいの形があると思いますが、「向こう三軒両隣」など、いざというときにすぐ駆けつけられる体制が求められているところです。  
→ある町内会では、班長ごと受け持ちエリアを決めて民生委員と連携しながら見守っているところもあります。

事業名 向こう三軒両隣の交流を深める

交流を深めるためには町内という大きな組織ではなく、小さいところから始めるのも有効な手段。

<活動内容>

- ・こまめにおたよりを配布(サロン・認知症講座・その他)
- ・回覧板を回す時に直接声掛けしながら渡す。
- ・子育て中の若い世代も子どものことを気にせず活動できるように、地域に子どもたちを託児する場所をつくる。
- ・自宅を開放してお茶会をする。
- ・公園清掃
- ・地域通貨制度(支援活動をしたらポイントがもらえ、支援して欲しいときに使う)
- ・ゴミ出し
- ・自分の生活範囲の中での周囲への声かけ

<活動場所>

- ・ゴミ捨て場、公園、空き家の活用、子供が気軽に行ける近所の家、児童館、町内会集会所  
コミュニティセンター、自宅解放できる方の家

<活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・公園清掃でおやつを配る(子供だけでなく、親も一緒に来てくれることもある)
- ・子育て世代が子供をみてもらいながら参加できる環境をつくる。
- ・地域包括支援センターに情報提供や手伝いなど協力してもらう。
- ・町内会・連合町内会・学校・ボランティアと連携を図る。ボランティアの活用。

<一緒に行う団体>

町内会(班の方たち)、町内会と関係している各種団体

<活動を行った場合に期待されること>

- ・問題の集積
- ・共通課題の理解
- ・町内での交流が深まることで高齢者、子供たちへの目が届いていく。
- ・解決策が見つかる。

東日本大震災の時には、隣近所同士で声を掛けあったという町内もあったようです。震災だけでなく、日常生活の中でも例えば雪かきなど、身近なところに頼れる人がいるだけで、「安心」につながることも多くあると思います。

→実際の活動の様子や地域の方の声を広報紙などに掲載し、地域のニーズや支援状況を知らせている地区もあるようです。

事業名 **参加者から支援者へ**

マンション・集合住宅に住んでいる方々の情報把握が難しいため、マンション入居者も地域の一員として参加してもらうことが重要。

<活動内容>

- ・サロンなどに参加できる方について  
お茶っこ飲み会→定着してきたら、地区の防災訓練などの参加を促す。  
外を歩こう会、防災講座→男性も参加しやすい。  
外の共有スペースで遊び場づくり（子供が集まる→保護者や高齢者も一緒に遊ぶ）  
趣味を深め仲間を集う（三味線など）  
住民みんなで七夕飾りづくり（ハロウィンやクリスマスなど季節の飾りづくり）
- ・外に出て来られない方について  
民生委員などが戸別に訪問→高齢者支援の一環としてヤクルトを配付している地区もある。

同時に地域包括センターなど  
による出張相談会を開催

<活動場所>

- ・マンションの共有スペースや空き室、町内会集会所、市民センター、学校

<活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・まず、管理組合や入居者、地域包括支援センター、地区民児協、PTA、老人会、幼稚園や保育園などと話す機会をつくり情報を把握する。
- ・誰を取り込むか（キーパーソン探し）→マンションの中に支援者をみつける。  
管理人やマンションの理事会などで情報を把握し、地域包括支援センターなどのバックアップを受けながらお茶会などの開催を準備。
- ・市民センターの広報紙などにマンションでの取り組み（茶話会など）を取り上げてもらう。  
記事をみて他のマンションも開催したい、という声があれば市民センターなどに連絡をもらう。

<一緒に行く団体>

市民センター、地域包括支援センター、地区社協  
小中学校（PTA）、大学、専門学校

<活動を行った場合に

**期待されること>**

情報の共有→人材の発掘→参加者から支援者へ。  
モノづくりを通じて達成感も感じる。

高齢化が進む都心部のマンション。  
入居者同士の顔の見える関係づくりを進めるために、地域包括支援センターなどが中心となって、マンションの管理人室でお茶っこ飲み会を始めたところがあります。管理人さんの協力もあり、入居者の中からお世話役も決まり、定期的開催するようになりました。  
大きな部屋がなくてもちょっとしたスペースが集う場になり、入居者同士のつながりを深めるものになっています。

事業名 **生き生き活性化プラン**

若い世代とつながりを作り、活動を行うことで、地域も生き生きとしてくる。

### <活動内容>

- 保育園→子育て世代の相談窓口として活用、保育園との交流。
- 保育園児や小中学生→高齢者のサロンに子供たちを呼ぶ。敬老祝いで訪問する際、一緒に訪問する。  
「児童館の子供たちと一緒に遊ぶ会」を開催し、地域の方たちに参加してもらう。
- 中・高・大学生など→学園祭に高齢者を招待してもらう。避難が必要な時、若者が高齢者へ声掛けする。
- サロンやイベントなど→地域交流会の開催。若い人を実行委員に取り込んだイベントを企画する（防災訓練・餅つき・まつり・大掃除など）「まつり」の活用（お祭りで顔見知りになるとコミュニケーションが出来てつながりになるのではないかと。学生にみこしの担ぎ手になってもらうなど）

### <活動場所>

町内会の集会所・市民センター・児童館・部屋の貸出をしているビルなど・まつり会場・空家・大きなマンションのエントランス・地区内の広場（公園・グラウンドなど）をイベントによって使い分ける。

### <活動を始めるとの準備や進め方>

- 協力者・協力団体を探す
  - ・学校、ボランティア団体との交流、対話
  - ・商店街役員とのつながりをつくる。
  - ・活動に協力してくれそうな人を見つけたら、タイミングを逃さず勧誘する。
- 組織作り
  - ・活動準備のためのミーティング
  - ・それぞれの団体からお世話役を出して委員会作りから。

学校や商店街などどのようなようにつながりを作っていけばよいのでしょうか？  
→市民センターは商店街と、地区社協は大学と連携しながら様々な活動を進めているところがあります。そうした事例を参考にすることも1つの方法だと思います。

### <一緒に行く団体>

町内会・市民センター・地域内の学校（小・中・高・大学）・地域内外の大学の学生グループ・老人クラブ・子ども会・地域包括支援センター・地区民児協

### <活動を行った場合に期待されること>

- ・児童、学生と高齢者との交流が深まる。
- ・若い人たちとの交流を深めることで高齢者がますます元気になる。
- ・若い人たちが高齢者と顔の見える関係になり、対応がスムーズになる。
- ・種々の活動や話し合いを継続することで、町の対応力がアップする。（問題が発生した時の対応力が付く）
- ・地域が活性化する。
- ・若い人たちを活用することで広報活動が充実し、多くの人に活動などを知ってもらえる。

事業名 世代を超えて安心できる地域と次世代をつなぐ

地域の様々な資源（人材も含む）を活用し交流の場を作る。同時に困りごとの相談会など開催し情報の把握や共有の場にもしていく。

<活動内容>

- ・四季に合わせ集まる機会を作る  
例) ・お月見会 敬老会やいも煮を組み合わせ開催  
・新年会 歌会やカラオケ、お酒も飲む、子供達も入れてカルタや福笑いなどをしてみる。※カルタや福笑いは、サロンで作成してはどうか。
- ・食事づくり（味の伝承）  
お煮しめ、おはぎや甘酒、漬物など高齢者を講師に若い世代と一緒に作る。  
→上記お月見会や新年会で食べてみる。
- ・サロン（さまざまな年代の方々が参加できる内容を企画）  
昔あそびの伝承（カルタや福笑いを実際に作ってみて一緒に遊ぶ）⇒世代間交流  
麻雀やウォーキング、ラジオ体操⇒介護予防になる。  
※サロンと同時開催で身近な集会所などで福祉相談会を行う。
- ・地域まつり（地域諸団体が一緒に行う）
- ・勉強会（身近な生活課題などを一緒になって行う）  
例) 片付け上手な住民を講師に技や工夫を伝授してもらう。

<活動場所>

- ・できれば徒歩で参加できる町内の集会所、調理関係は市民センターやコミュニティセンター、生協など。ウォーキングやラジオ体操は外に集合でも可

<一緒に行う団体、活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・町内会、地域の方→サロンや食事の講師
- ・地区社協、地区民児協、子ども会、児童館、市民センター→地域まつり
- ・地域包括支援センター、老人クラブ→敬老会 ・その他 小中学校、行政などにも声がける。  
※年度初めに各団体が役割分担、場所の確保をして開催してみる。

<活動を行った場合に期待されること>

世代間交流、情報共有、担い手の育成、地域諸団体と一緒にすることで連携が進む。

七夕飾りづくりなど季節の行事を通じ、世代間交流をしている町内会なども多いようです。1年に1回だけでなく、他の行事でもふれあう機会が多くなると、住民同士の関係も深まっていくと思われます。ある地区では、市民センターを会場に毎年1月に老人クラブなど地域諸団体が協力し合い、地区内の親子を対象にもちばなづくりを行っています。伝統行事を次世代に伝える大切な活動にもなっています。

事業名 **地域の活性化**

身近な地域の中に自由に使える活動場所がないので、自由に集える場所をつくりたい。

### <活動内容>

- ・時間に左右されず自由に遊べて楽しめる場  
コーヒーやお茶が飲める。  
フラワーアレンジメントや工作、囲碁、将棋、麻雀の日など趣味の日を決めて実施。
- ・若い世代（大学生など）や新住民と地域住民との交流促進の場  
ラジオ体操や茶話会、昔あそびの会
- ・情報発信、情報共有の場  
認知症講座の開催や地域包括支援センターや民生委員、地区社協などによる出前相談会の実施

### <活動場所>

町内会集会所、公営住宅の集会所（マンション、復興公営住宅集会室含む）、アパートや公営住宅の空き部屋、空き家、神社やお寺、病院の会議室、児童館など

### <活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・場所を探す（地域内で情報収集）  
空き家や空き店舗→地元詳しい町内会長や関係機関などがアプローチ  
病院などの一室→通院している方から話してもらう。  
県営・市営住宅の一室→管理者である住宅公社や行政などに話してみる。
- ・場所の管理  
管理に関わる担い手の育成や確保は、市民センターで開催するボランティア養成講座などの修了者や地域の中で話し合いながら適任者を確保していく。
- ・場所の経費  
共同募金の助成金の活用など

### <一緒に行く団体>

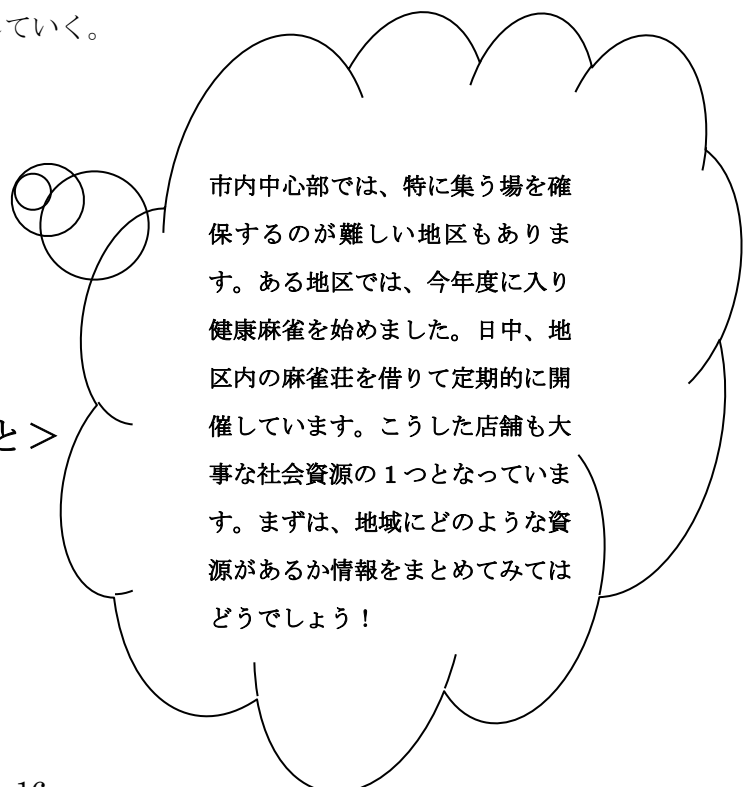
地区社協、町内会、地域包括支援センター  
地区民児協、市民センター、子ども会、  
日赤奉仕団

### <活動を行った場合に期待されること>

地域住民同士の交流促進  
介護予防（元気な高齢者を増やしていく）  
情報の把握、世代間交流、人材の確保



地域の活性化につながる





事業名 つながる

各団体はそれぞれ一生懸命活動しているが、他団体とのつながりが薄い。  
団体同士のネットワークができると世代間交流にもつながる。

### <活動内容>

- ・お料理教室→作る事に集中して会話が広がらないのでは？
- ・着付け教室→集まる年齢層が決まってくる、参加者は女性が多い。



- ・各世代の接点をつくる（楽しい活動）  
高齢者から子供まで老若男女を対象とした楽しい体操（NHK やっぺ体操のような）を行ってみてはどうか。

### <活動場所>

集会所、学校、コミュニティセンター、児童館、保育園、幼稚園

### <活動を始めるまでの準備や進め方>

- ・町内会やサークル活動、行事に興味を持ってもらう。  
地区内に自転車通行帯設置予定→設置に関する会合→マナー教室（親子参加）  
→町内会員の意識の掘り起こしにつながる。
- ・定期的活動→決まった日に決まった場所での活動を覚えてもらう。
- ・細かい対応→個人への声かけ  
お手伝いしたいが誰に伝えればよいかわからないとの声あり、若い世代の方にどんどん声をかけてみる。
- ・いきいきサロンの企画検討→若い方の意見を聞き講師になってもらったり、軽いお手伝いを依頼
- ・月 1 回の回覧では気づかれないので、積極的な声かけ→クチコミ作戦で広める。

### <一緒に行う団体>

老人会、町内会、サークル、子ども会、PTA

### <活動を行った場合に

#### 期待されること>

地域が明るくなる。  
防犯になる。  
情報の共有になる。

町内回覧や直接声かけを行っても、なかなか協力者を集めるのが難しいという話をよく耳にします。

例えば、上記自転車通行帯設置などをきっかけに住民同士の話し合いやマナー教室の開催などを絡めることにより、新たな参加者（協力者）と出会うこともあるのではないのでしょうか？  
新しいことを始めるより、今行っていることを絡めていく方が取り組みやすい場合もあるため、もう一度地域で何が行われているか話し合ってみてはどうでしょうか。